

【論文】

恐怖を抱くのは誰か —トルコ共和国でのフィールドワークを通じてみた 「テロリズム」と恐怖の「あり方」をめぐる試論—

小川 杏子

I はじめに～トルコ共和国滞在が気づかせたもの～

2015年11月に起きたİŞİD¹⁾ (イスラーム国：以下国内での報道に合わせISとする)によるとされるテロを含め、トルコ国内では周囲の情勢の変化から、これまでにない形の「テロリズム」の「脅威にさらされている」。実際、私自身²⁾も2013年に初めてトルコに行った際には「テロ」攻撃への恐怖などを覚えることはなかった。しかし、2014年以降、都市中心部における「難民」の増加などの変化を感じるとともに、現在は「テロ」攻撃への危険も感じるようになった。もちろん、「新たな」テロ組織、ISの台頭など、以前と情勢は異なるのであると思う。そのため、トルコに行くというと「大丈夫?」「危ないんじゃない」と声をかけられることが多い。

しかしながら、トルコに滞在し、その他の中東の国から来ている学生やトルコの友人と出会う中で、「大丈夫?」という言葉に違和感を覚えるようになった。そして、日本で「またテロが」「現地在住の日本人は巻き込まれていない」と報道が流れる中で、「あの場所」にいる友人やいつも会う人たちを思うと、確かに「日本人」は大丈夫かもしれないけれど、そこには同じように生きている人がいるはずなのに…と憤りを感じるようになった。言葉の先にある、置かれている立場の非対称性とそれぞれの置かれている状況を作り上げている社会構造との関係が気になったのである。また、「ヨーロッパ」の国々でテロが起きた際にはSNS上で起こった“pray for ○○”がトルコのテロの後には起こらないことへの違和感をトルコの友人から耳にした。

そもそも「トルコが危ない」という認識は、すなわちその「恐怖」はどのように作り上げられているのか。本論ではまず、トルコ共和国の現代史における「テロリズム」の背景をなす文脈を見る。さらに、さまざまに語られる「テロリズム」の「恐怖」を検討することによって、「恐怖」の所在とその意味を検討したい。

II 「テロリズム」とは何か?

1. 「テロリズム」と「正戦」

そもそも「テロリズム」とは何であろうか。「テロリズム」という言葉はフランス革命後の「恐怖政治」体制を指し示すものとして誕生している³⁾。この成立の過程からも分かるように、基本的には「国家の中心」の側から定義される言葉であり、それは共和主義者とテロリストが同一視されていたことから指摘できる。ゲイロー・セナ (2008) は、古典的テロリズムと現代的テロリズムを分け、特に冷戦時代のテロリズムまでは象徴的な人物を攻撃していたのに対し、現代のテロリズムは社会を変えるために恐怖心をおおるといった形で精神を狙うようにならってきているとする。一方で彼らも指摘し、タウンゼント (2003) も述べるように、そもそも定義づけること自体を疑問視する声もある。それは、「テロリズム」とは、常にラベリングされてきたものであり、自らが「テロリスト」であると名乗ることはほとんどなかったからである。またGregory (2009) においても、「非国家アクター」によるもののみとするか、「国家アクター」によるものを含めるか——すなわち国家による「暴力」をテロリズムに含めるか——という点において、議論があるとしている。

「文明の衝突」論を批判する論者、タラル・アサドやアルジュン・アパデュライらは、「正戦」(Just War) は物理的な暴力を使うことの正当性を示すために主張されるものであり、「国家」も「テロリズム」と同様に人々をおびえさせるような暴力を使っていると指摘する (アサド2008, アパデュライ2010)。実際に、2001年9月11日の同時多発テロ後のアフガニスタン戦争やその後大量破壊兵器の所持を理由として起きたイラク戦争は、自国のあるいは集団的な「自衛権」を名目に「戦争」が正当化されたが、これについては現在でも議論がある。このように、あるものを「テロリズム」とし一方を「正戦」とすることは、「われわれ」の中にある矛盾を隠し、ある種の暴力の使用を正当化し、その構造の中にある「彼ら」という「他者」と「われわれ」の空間を区切るものにほかならない⁴⁾。

2. 地理学における「テロリズム」をめぐる議論

*Dictionary of Human geography*では、2009年に出された第5版で初めて“Terrorism”の項目が設けられている。ここでも指摘されるように、地理学の分野においても、他の分野同様に、2011年の9月11日のアメリカでの「同時多発テロ」後に盛んに「テロリズム」に関する議論がなされるようになった。GregoryとPredも同様に『暴力の地理学』(Violent Geographies)の中でこれまでの議論のあり方を批判している。

9.11後に見られた立場の一つは、ワールドトレードセンターとペンタゴンへの攻撃を“蛮行”とし、その点でテロリズムの後進性・他者性を指摘するものである。それゆえに「テロとの戦い」(“War on terror”)を正当化するものであった。もう一つの立場は、9.11への単に技術的なあるいは手段となる対応を提案するもので、テロリズムの予測・恐怖の管理といった、リスクアセスメントの地理、地理空間的なデータ管理とモデル化、テロリスト攻撃に対抗する環境構築を重視するものであった(Gregory 2009, Gregory and Pred 2007)。

この二つのアプローチは以下の点において結びつきがある。第1に、「大衆的 (popular)」な地理的想像力 (geographical imaginary) の力によって描かれ、それによって普及される偏見を通じてそれを人々に再生産 (reproduce) している。第2に、客観的科学と思われることによって特権の与えられる「専門的」解決方法を求めるものである。それは、「私たち」の空間の境界を越えてくる異常な「他者」というものに目を向けさせ、次に、「国家安全保障」(homeland security) といった形で自身の空間を守ることに焦点を当てさせることである。ここでは、片方の空間は「野蛮な空間」(wild space) であり、自己の空間は「安全な空間」(safe space) である (Gregory and Pred 2007: 1)。ここで引用されている、9.11後のあるコメンテーターの次の言葉はそれを象徴的に表している。「世界の野蛮な空間と安全な空間がニューヨークで衝突する」(Gregory and Pred 2007: 1)。このような地理的想像力にもとづいて、国際法上は違法であるはずのアフガニスタン戦争やイラク戦争に「自衛権」が発動され、戦争の承認のレトリックに使われたのである。

Gregory and Pred (2007) は、前述の二つの立場の双方を地理的想像力 (geographical imagination) の決定的な誤りと捉え、これらの研究の中でなされた仮定や議論を批判的に検討することをめざしている。またそれとともに、9.11だけではなく様々な暴力 (アイルランドの紛争など) を取り上げることによって、最終的には、現在

の恐怖 (terror) 恐れ (fear) そして政治的暴力のランドスケープに、より効果的でより公正な介入をもたらす方法を提示することができるのとらえているのである。そこでは、現在みられる暴力の歴史の検討を通じて、暴力がいかに関係する文脈の中で創られ、歴史的に連続性があるか、ということをはっきりと示している。また、「想像の地理」(imaginative geographies) に目を向けることで、いかにイメージと言葉が強大な力を解き放ち、「偏見」といった形でのそれらの伝播がいかに深刻な物質的な結果をもたらすかを、東南アジアやグアタマラ収容所の事例などをもとに論じている。本稿もそのような従来の「地理的想像力」を批判的に捉える立場に立つとするものである。

III トルコ共和国における「テロリズム」

トルコ共和国大統領エルドアン⁵⁾ は、PKK (クルディスタン労働者党)、IS、FETÖ (フェトフッラー主義者のテロ集団)⁶⁾ を「テロ組織」と名指している。また2016年11月4日には、親クルドの政党とされる、HDP (Halkların Demokratik Partisi 人民民主党⁷⁾) の共同党首らをPKKと関係を持ちテロ組織を運営したとして逮捕し、禁固142年の刑を言い渡した。これに対しては、「強権体制」を強めているのではないかという欧米からの憂慮も見られる⁸⁾。

トルコ共和国で「テロ」攻撃が頻発するのは、特に1970年代以降のことである。この「テロリズム」は1980年の軍によるクーデターを招いた一因であるともされている。その初期の時代においては左派と右派という政治的対立によるものとされることが多いが、PKKの活動の活発化とともに、次第にクルド・ナショナリズムとともに語られるようになる。以下、トルコ共和国の現代史を踏まえたうえで、2000年代までのトルコ共和国における「テロリズム」の背景とその傾向について概観したい⁹⁾。

1. トルコ共和国と「テロリズム」

トルコ共和国では、1950年代から冷戦構造の中で、アメリカの援助による経済的不安定性と、反政府運動への統制の強まりによる社会的不安定性が高まる¹⁰⁾。それは1960年に起きたクーデターでも解消されることはなかった。60年代の政治状況は、建国の父と呼ばれるケマル・アタテュルクの方針を引き継ぎ世俗主義の立場をとる共和人民党が政権を握っているものの、単独過半数に及ばない不安定なものであった。さらに、1965年10月に中道右派でイスラーム¹¹⁾の国家規制を緩めた民主党¹²⁾を継承した公正党が政権に就くと、イスラーム勢力が再び活発

化する。1960年代は世界の他の国々と同様に、トルコ共和国においても学生運動が活発化した。特に1968年から71年にかけて、学生運動はトルコ革命青年連盟といった形で組織化され、左派政党の支持母体となるとともに、大学を中心に反戦運動や政府批判運動が広がった。それにとともに右派・左派の対立が活発化し、社会不安が増長することとなったのである。これを受けて、1971年には、軍が社会不安の解消を求めて政治介入するが、結局左右の対立が沈静化することはなかった。

この2度の軍の介入によっても収束することのなかった政治的対立は、続く1970年代にも不安定性をもたらした。共和人民党も公正党も国民の絶対的支持を受けることはできず、10年間に11回の政権交代が起きるなど、政治的に非常に不安定な状態となった。また、1973年のオイルショック、1974年のキプロス紛争とその後のアメリカによる制裁など、トルコは経済的にも苦しい状況に置かれており、社会・経済・政治全てが不安定な状態だったのである。この不安定さは、左派・右派およびトルコ・クルド両民族主義的ナショナリストの伸長と対立の激化、そしてそれにとともなう暴力と多くの死者をもたらし、1971年4月には戒厳令が施行された。これらが1980年のクーデター後に「テロリズム」として規制の対象になるのである。

1) 右派・左派の対立の拡大

1970年代の混迷の時期には、1970年に誕生した親イスラーム政党である国家秩序党、そして1971年に解党した国家秩序党の後を継いだ国民救済党が勢力を拡大させ、イスラーム勢力が徐々に力を伸ばしていく¹³⁾。国民救済党は、1974年、77年には与党公正党と連立内閣を組むほど勢力を拡大させ、イスラーム的な政策を進めていった。また、1970年代に国民救済党とともに政治決定においてキャスティングボードを握っていたのが、民族主義

者行動党である。この政党は、汎トルコ主義と反共産主義を掲げた政党である。「灰色の狼」と呼ばれる青年行動部隊を創り、ナチス突撃隊 (SA) をモデルとした軍事訓練を行い、時には警察とも結びつきながら、左派を襲撃していたとされる。

このように、1970年代は、このような右派勢力による、共産党を中心とした左派勢力への「テロ」行為が増大し、左右の対立が激化した時代である。そして、1979年10月の上院選挙によって中道右派の公正党が単独政権を握った時代においても、国内情勢の不安定さは解消されず、左右の対立という外観を装った宗派対立・民族問題が激化していく。1979年1月から8月の「テロ」による死者数は1800人以上であったと言われ、暴力をとともなう激しい政治運動により社会不安が増大していくこととなるのである。

2) クルド・ナショナリズムの拡大

「クルド問題は時の政権の安定度のバロメーター」と言われ、トルコでは社会や政治状況が不安定になるとクルド・ナショナリズムが活発化すると言われる。1970年代末はPKK結成に象徴されるように、クルド・ナショナリズムが組織化されていく時期でもあり、クルド・ナショナリスト達も、上述のような政治・社会不安の増大という状況に呼応して活動を活発化させていたのである。そして彼らの活動はトルコ共和国を壊しかねない「分離主義」とみなされていくことになる。

1979年12月末には「ケマリズム体制の擁護者」である軍が、これらの分離主義や国内の破壊活動の横行に対して警告を発し、1980年9月12日にはクーデターを起こす。クルド・ナショナリズムは、このクーデターでの主な標的の一つとされ、それゆえに、1980年のこのクーデター以降、政府によって厳しく抑圧され、法規制だけでなく、様々な圧力が政府によってかけられたのである（若松

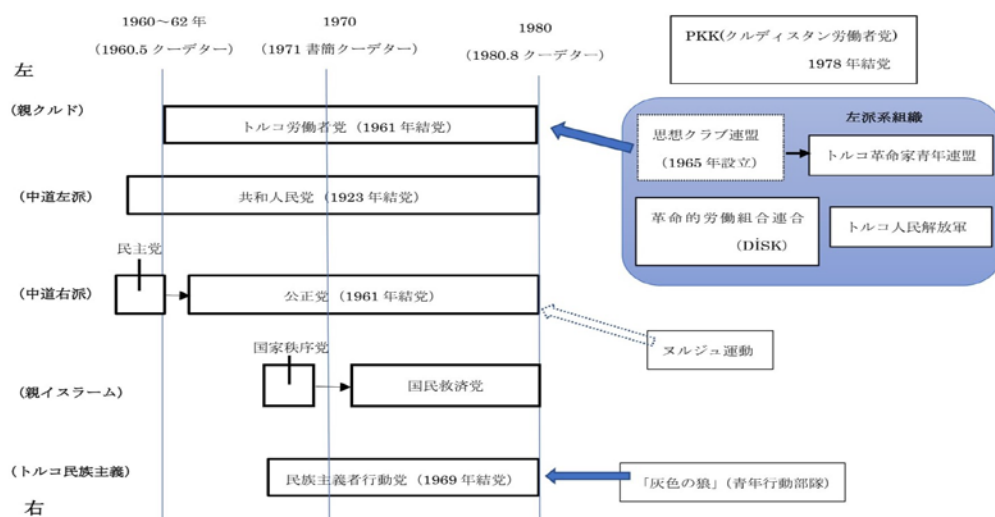


図1 1960年代～1980年代の主な政党と社会的勢力
(出典:今井(2017), 新井(2001)をもとに筆者作成)

2008 : 35)¹⁴⁾ . 1980年代以降, 国内においては, 弾圧された状況に置かれたクルドの人々の間で, PKKを中心に, クルド・ナショナリズムの高揚がみられるようになる. さらに, トルコ国内に打撃を与えることになるのが, 1984年からのPKKによるテロ活動の活発化である¹⁵⁾ . 1997年までにテロによって4万人が犠牲になるなど, 治安上の大きな問題となっていく. 1987年には南東部でのテロリスト攻撃の増加にともない, 非常事態宣言¹⁶⁾ がこの地域に出されている.

2. トルコにおける「テロリズム」の変遷と中東情勢

前節までで紹介したように, 1970年代後半以降, 右派・左派の間のコンフリクトと, 民族「問題」による分離主義の台頭は, 多くの「テロリズム」をもたらした. 「実行犯不明の政治的殺人」(actor unknown political murders) の分析の中で, Sadik Toprakはトルコにおけるテロリズムの傾向の変化について, 地理情報システム(GIS)を用いてそれを地図化している. それによると, 1975年~1993年の時代には「対立」に大きな地理的傾向はなく, 24もの都市で見られた. しかし, 1994年~1999年には, PKKによるテロが1984年以降に活発化したことからわかるように, トルコのクルド分離主義者の活動と関係し, 南東部の人口の多い都市で多くみられるようになる. 2000年~2006年になると, イスタンブルと南東部の8つの都市のみとなり, 政治的「安定化」がみられる. 新井(2008)によれば, これは, 1999年にPKKの代表オジャランが逮捕されたことが影響している. オジャラン逮捕後, PKKは分離主義的な闘争から政治的な解決を目指すものへと変化したと考えられている. この後2012年12月にはトルコ政府のPKKの和解交渉が進められ, 2013年3月にはPKKが撤退方針を発表し, 「停戦合意」がなされ, 政府との関係の修復が図られた. しかし2014年2月に合意した内容についてのエルドアン大統領の反対を受けて, 解決プロセスは停滞した¹⁷⁾ . さらに, 2015年7月のクルド人を狙ったとみられるISのテロ後, 政府が未然に防ぐことができなかったことへの報復としてPKKが警察官を殺害する出来事が起きる. それにより, 「休戦」が崩れ, 南東部での戦闘が激化しているのである¹⁸⁾ . 今井[2016]によると, これにともなうクルド人犠牲者の増加が, 都市部でテロ活動をする「クルディスタン自由の鷹」(TAK)の活動を活発化させている.

これに加えて, 2015年以降新たなテロリズムとして顕著となるのがISの脅威である. ISとそれをめぐる「戦い」でトルコは難しい立場を迫られることになる. ISをめぐっては, 2014年8月8日に「有志連合」諸国が, ISが米・

表1 ISによる「テロ」(2015年6月)以降, トルコで発生した主な「テロ」事件

年月日	都市	実行犯	犠牲者	場所
2015年6月5日	ディヤルバクル	IS	4名	
2015年7月20日	スルチ	IS	32名	
2015年10月10日	アンカラ	IS	103名	アンカラ駅前
2015年12月23日	イスタンブル	TAK	1名	サビハギョクチュエン空港
2016年1月12日	イスタンブル	IS	10名	
2016年2月17日	アンカラ	TAK	28名	チャンカヤ区
2016年3月13日	アンカラ	TAK	37名	クズライのバス停
2016年3月18日	イスタンブル	IS	5名	
2016年6月29日	イスタンブル	IS	36名	アタテュルク空港
2016年8月20日	ガズリアンテップ	IS	50名	結婚式会場
2016年12月11日	イスタンブル	TAK	46名	スタディアム
2016年12月31日	イスタンブル	IS	39名	ナイトクラブ

(出典) 今井(2016)に, 新聞報道などをもとに筆者加筆・修正)

英・仏市民を斬首刑にしたことを背景にISへの武力行使を開始した. ISをめぐる世界戦略におけるトルコの重要性から, アメリカを中心に同国の参加を求める声が大きかったが, トルコは「有志連合」による戦略への積極的な参加姿勢を示さなかった. そこには, 近隣諸国の不安定性に巻き込まれる可能性の高さや, 国内と国外の問題がリンクしているという背景があった(新井 2015b, 内藤 2014). 有志連合がISとの戦いのために連携をしているシリアのクルド諸勢力(クルド人民防衛隊・YPGや民主連合・PYD)の中にはPKKが支援をしているものがあるとされ, 彼らへ武器提供などの支援をすることがPKKの勢力拡大を招くことになるのではないかと懸念があったのである. これは, 国内においてISと同様かそれ以上にPKKに対する不安も大きいというトルコの歴史的経験に基づく意識が影響を与えている(新井2015b, 岩坂2016). さらに, 2011年3月にアラブの春の流れを受け, シリア国内でも反政府デモが行われたが, それに対して弾圧したアサド政権へ批判姿勢を示してきたトルコには, アサド政権と対立するISを攻撃することが間接的にアサド政権を強化するのではないかと懸念もあったとされる. また, 中東の国であるトルコという立場も参加を難しくした一因であるという指摘(新井2015b, 内藤2014)もあ

る。

しかしながら、2015年にISによる攻撃が起きると、トルコは、アメリカ軍に基地の利用を認めるなど、その態度を変化させることになる。これに関しては、難民の流入がトルコに大きな影響を与えることになったからという指摘もある¹⁹⁾。

このようなISおよび「クルド人」組織であるTAK（クルディスタン自由の鷹）の大都市部でのテロリズムの「出現²⁰⁾」は、「これまではそうではなかった」とトルコ人の友人が言うような新たな恐怖をもたらし、人々の空間での行動にも変化をもたらした。アンカラの状況を述べれば、2016年3月のテロ後は、SNS上で中心地に近い地域は危険という情報や、「次にここで起きる」という噂が流布し、普段は飲み客や買い物客で賑わうTuna11（トゥナル）エリアも人が見られなくなった。また、トルコ人の友人からもアンカラの中心地であるクズライやメトロの乗り場、ショッピングモールのような場所では立ち止まるなどと言われ、人と待ち合わせをする際にも、わかりやすいAVM（ショッピングモール）ではなく、中心地から離れた場所を選ぶことが多くなった。このように「恐怖」（terror）によって人の行動を動かすものがテロリズムである、とも言える。

IV 恐怖のかたち

「テロリズム」によってもたらされる「恐怖」は場合によっては民意を変え、国の政策を動かし、国による統制を容認し、新たな暴力を生み出すものとなる。それでは、この「恐怖」はいったい誰によって語られるのだろうか。その「恐怖」はどのようなものなのか、そしていったいどうしてその「恐怖」が現れるのだろうか。

「恐怖」について、イーファー・トゥアン（1991）は次のように述べる。恐怖を形づくるのは「不安」と「警戒心」という二つの心理的緊張の複雑な絡み合いである。ここでの「不安」とは「漠然と拡散した恐怖感であり、その前提となるのは予測する能力」である、そして「警戒心」とは「環境に普段と違う出来事が発生することで喚起される」ものであり、この感情が生まれると「動物は本能的に闘うか逃げ出すかのどちらかの反応を示す」という（トゥアン1991：15）。「不安」と将来への予測との関係については伊藤（2016）も、脳神経科学の視点から同様の指摘をしている。本稿ではこれらの議論をふまえ、「恐怖」は将来への「不安」と「警戒心」の複雑な絡み合いから生まれると捉えることにする。

以下では、まず2015年以降報道されている「トルコにおけるテロリズム」というイメージがもたらす「恐怖」

の不均衡性について考察する。次に国家によって「テロリスト」による攻撃であるとされた出来事をめぐる「恐怖」を様々な面から検討する。それを通して、「恐怖」の持つ政治性を明らかにしていきたい。

1. トルコが「危ない」のか？～地理的イメージの不均衡性～

日本で投げかけられる、「トルコは危ないでしょ」「気を付けて」という言葉。そこには「西欧」に行く人には向けられることのない言葉のニュアンスがある。他方、「ヨーロッパも危ないから気をつけてね」という言葉。この「も」の先には何があるのだろうか。

アンカラで、そしてトルコ国内でテロが相次いで起き、多くの人々が犠牲となった。それと同じ時期に、パリやベルリンでもテロが起きた。どちらも同じISによるとされるテロである。しかし、SNS上での追悼の広がり方には違いがみられた。2015年11月13日にパリで起きた同時多発テロでは、これを受けてSNS上では、14日頃から自身のプロフィール写真をフランス国旗の色にし、追悼の意を示す、pray for Parisの動きが広まった。しかし冒頭に述べたように、その後も続いて起きるトルコでのテロの際にはこういった動きは見られず、それに対し、トルコの友人は違和感を口にしていた。

日本経済新聞の記事を概観すると、お互いに特徴的なものがみられる。トルコのテロのことが報じられる際には、「トルコテロ、死者44人に クルド系野党など235人拘束」（2016年12月13日付）、「銃乱射1週間 テロ封じ込め難しく エルドアン氏強権を維持」（2017年1月9日付）、「テロ再発、揺れるトルコ。首都爆発、28人死亡」。

「クルド人勢力が犯行」報復へ。「イスラム国」掃討遅れも」（2016年2月19日付）といったように、「トルコの強権化への懸念」や「政治運営能力のなさ」などが報じられる。これに対し、フランスでのテロに関する報道では、「追悼する民衆」が前景化する²¹⁾。

そこには明らかに「中東」の一部であるトルコと「西欧」という、場所イメージの差異がある。サイドは『イスラム報道』の中で、アメリカのメディアにイスラームが登場するのは、何らかの危機的状況が発生したときに限られていると批判する。福田（2007）も日本における国際ニュースの中でのテロについての報道の分析を通じ、サイドの述べている構造は日本でも同様であり、テロ事件や紛争やエネルギー危機といった問題とともにイスラームが報道・表象されると指摘している。

高木（2005）も指摘するように、そこには欧米中心主義的な地政的想像力がある。トルコ共和国の「中東」と

いう地理的な位置と「テロ」といった言葉との結びつき、そしてメディアでの報道が一定の場所イメージを生み、それが欧米とは「異なる場所」であるトルコに対する「恐怖」のイメージとその非対称性を作りだしているのではないだろうか。しかし、歴史を概観して明らかとなったように、クルド諸勢力との関係においてトルコ共和国が現在置かれている状況や難民・ISといった問題は、欧米諸国との結びつきの中で生まれたものであり、本来「われわれ／彼ら」といった文脈で切り分けることができないはずのものである。

日本から見る「危ないトルコ」もまたイメージの産物であり、そこに生きる人々のリアリティを反映していない。前段の最後にも述べたように、そこで生活をしている人の中では、さらにローカルなレベルでの「恐怖の空間」の線引きがなされているのである。

2. 「恐怖」の多様性と構築性～2016年7月15日の「クーデター」の場合～

「テロリズム」や「テロリスト」と言うと、9.11の影響もあり、すぐに自爆テロが思い浮かぶ。しかしながら、「テロリスト」と表現されるのは、単に自爆テロを起こした者だけではない。様々な「暴力」が「テロリスト」によるものとして描かれる。2016年7月15日に起きたFETÖによるとされる「クーデター」もそのひとつである。アンカラでは戦闘機の飛び回る音とともに、そしてイスタンブールではボスフォラス大橋のヨーロッパ側への道が封鎖されたというニュースとともに始まった「クーデター」。これはギュレン派——過去には現政権AKP（公正発展党）と協力関係にあったこともあると言われる——のテロ組織FETÖのメンバーでもある軍関係者が起こしたとされ、「民衆による抵抗」が勝利し、未遂に終わったとされる。その後、「民主主義」の勝利が祝われ、民衆は「民主主義の番人」(Kapıcı)と称されることになった。そして連日のように新聞にトルコの国旗とともに、自分たちも「民主主義」を支持しているという企業の広告が出された。テレビでは毎日のように犠牲となった人の家族の声やドキュメントが流され、街の中心部の液晶スクリーンには犠牲者の写真が流された。「クーデター」の後3週間ほどにわたり、バスやメトロが無料化され、夜になると街の中心部で集会が開かれた。イスタンブールでは7月26日にボスフォラス大橋の名前が「7月15日殉教者の橋」(15 Temmuz Şehitler Köprüsü)に変えられるなど、国全体で「民主主義」の勝利を祝い、「殉教者」を悼む空間が創り出されたのである。

これは、先行研究(バトラー2007)でも指摘されてい



図2 「クーデター」後のアンカラ中心地

筆者撮影。この時期にはトルコ国旗の生産が間に合
るよ わないと言われるほどであった。 けた

「ナショナルな追悼」の場面にほかならない²²⁾。

一方で、「クーデター」後、ギュレン派と関係があるとされる人々の公職からの大規模な追放や、関係するとされた大学の閉鎖・学長追放が行われた。また、学者や市長や公務員などに与えられるグリーンパスポート所持者の海外渡航の禁止令が出され、一部公務員の長期休暇の取り消しも行われた。そして、現政権を批判するコメントの削除や、投稿内容への自主規制がSNS上で起こった。そこには、現政権を批判することが、クーデターを支持し「民主主義」への反旗を翻すことを意味すると捉えられるという懸念があった。そして自身の仕事を失うかもしれないという恐怖や、何がきっかけで捕まってもおかしくないといった恐怖があったのである。クーデターに関わる様々な会話も、自身が本当に信頼している人と「安全な場所」で行うようになった。これは国の「テロリスト」に対する恐怖とは異なる「恐怖」であり、国家による「テロリズム」への絶対悪の付与が生み出したものといえる。

もちろん、戦闘機が頭上を飛び交い、爆撃音が鳴り響き、状況の分からないまま外出禁止令が出されるからと最低限の水や食料品を買いに行ったあの夜は、友人の言っていたように「人生で一番の悪夢」であったことは否定できない。しかし一方で「クーデター」後の状況においてもまた、別の種類の「恐怖」が渦巻いていたのである。

他方で、「クーデター」が失敗したことを喜ぶ声ではなく、エルドアンを批判する声ばかりがヨーロッパから聞こえるのが怖い」というトルコの友人の言葉に示されるような「恐怖」の声も無視できない。クーデター後にシリア出身の友人が面白いものを見つけたと見せてくれた、中東諸国を順に訪れた死神(アメリカの国旗のようなもの

をまとった)がトルコでは追い出される絵。これらは、中東における世界認識の一つの側面を見せていたように思う。人々の感じる脅威は、単に「テロリスト」や国による「テロとの戦い」の中で日常生活にもたらされるものだけではなく、外側からのまなざしや関与に対しても向けられていたのである。

これまで議論されてきたように、クーデター後のトルコの状況には、ナショナルな悲しみが流布されてしまうという問題も指摘できる。しかしながら、人々の恐怖のありようをみていくと、それだけではなく、「西欧」と「中東」という枠組みや彼らの国の置かれた「コロニアル」な歴史的背景がそこには影を落としていることがうかがえる。「恐怖」は政治的であると同時に、複雑で社会的なものにほかならないのである。

だからこそ、そこに住む人々と「出会うことのない」物理的に離れた地域へのイメージ、すなわち「地理的想像力」によって語られる「トルコ「は」危ない」という「恐怖」は「なぜ危ないのか」ともう一度問い直す必要のあるものなのではないだろうか。

V おわりに～恐怖を感じる／語る私は何者か～

「読者よ、どうか私たちの姿を想像していただきたい。そうでなければ、私たちは本当には存在しない。(中略)もっとも私的な、秘密の瞬間に、人生のごくありふれた場面にいる私たちを、音楽を聴き、恋に落ち、木陰の道を歩いている私たちを、あるいは、テヘランで『ロリータ』を読んでいる私たちを。それから、今度はそれらすべてを奪われ、地下に追いやられた私たちを想像してほしい。」(ナーフィーシー2017:16-17)

自分の価値観が打ち崩される経験。私がそんな経験をした一つが、2015年のトルコ滞在の際に友人たちとゲームについて話していた時の出来事であった。

ある友人が「子どもの時ゲームばかりしていた」と話したのに対し、他の友人が「ゲームばかりするのはよくないと思う。もっと外で遊ぶべき」と言った。言われた友人は急にイライラした口調でこう応えた。「イラクでは外に出ると爆弾(攻撃)があるかもしれないから、家にいるしかないんだ」と。

私はこのことを想像したことがなかった「日本」という国で育った私も「ゲームをするよりは外で遊んだほうがいい」と思う一人だったからだ。そのイラク出身の友人の言葉に、自分自身の地理的想像力がいかに自分の置かれた環境に根差したものであるかということに気づかされた。

トルコには、特にイラク戦争やシリア内戦後、周辺の国々から多くの学生や若者が職や学びを求めて移住している。そして、トルコには「自分の国から逃れる」経験をした多くの人が住んでいる。彼らの話からは、いままで想像をしたことのない状況を聴くことが多い。そして、彼らにとって「ここで生きていく」あるいは「自分の国に帰る」という選択肢は、「自由」の中で選ばれたものではないことが多いのである。そして、トルコの友人も「テロリズム」は怖いけれど、これから自分の国がどうなるのか分からないけれど、ここには大切な人もいるし自分の国だからどうしようもない(yapacak bir şey yok)と語る。

自らの意志でトルコへ行き、数か月後には日本という「安全な国」に帰る自分。彼らは気に留めないかもしれないが、そこで私は自らの「恐怖」を伝えるということができなかった。そこには置かれた状況の圧倒的な違いと彼らの知っている「恐怖」の想像しえなさがあったのである。「テロリズム」ではなく、「恐怖」を見ることを通じて見えてきたこと、それは歴史的に作られてきた不均衡性による「恐怖」の位相の差異にほかならない。

西加奈子は小説「i」の中でこんなことを書いている。主人公であるアイはシリア出身の養子であり、日本人の母とアメリカ人の父のもと、アメリカと日本で育つ。彼女は成長していく中で、さまざまな「〇〇」という形で社会によって与えられる枠組みによって自分自身のアイデンティティが揺るがされ、葛藤する。自分でも理由がわからない中で、アイはひたすらノートに世界で起きた紛争や災害での死者数を書き留める。そして日本で震災が起きた時、アイはアメリカに住む両親や友人の説得にもかかわらず、東京にとどまることを選択し、のちにこんな風に語る。

「私のルーツがシリアだから、私に(シリアで写真を)撮る権利があるとあなたは言う。でもあなたにはそれが無いのはおかしい。あなた(日本人のカメラマン)はシリアのことをこんなに思っているのだから」。そこまで言って気づいた。(中略)「地震のとき、私は残ろうと思ったの。両親もミナもアメリカにいて、こっちに避難してきてと言った。私には自分を縛るものは何もなかった。アメリカにすぐ飛んでも良かった。でもそうしなかった」。(中略)「あの時私は、残るべきだって思ったの。残ることできつと、」(中略)「命の危機を、その恐怖を語る権利を得たかったのだと思う」。

日本に帰ってきて、トルコに行っていたことを話す。

すると、私は「恐怖を語る権利」を与えられ、その場にいた人として「恐怖」を語ることを求められる。このように一般的に「恐怖を語ることの正当性」は、どこかで、「その経験を共有していること」を求めるように感じる。

一方で、トルコで出会った「トルコ人」や中東出身の友人を目の前にした場合、私はそれを求められることはない。友人たちと語っていると逆に「あなたは甘い」ということを突き付けられることがある。「私にはこんな風に見える」と。そして私には、彼らの方がより「語る権利」があるように思ってしまうのである。そして、自分の語ったイメージから「恐怖」が切り取られ、「正義」とともに流布していくことが怖くなる。「共感」は暴力にも結び付きうるのである。

ただ一方で、「私にはこんな風に見える」を「本当に存在させる」ために、誰かに伝えなければとも思う。だから今は『『恐怖』を語る私は何者か』を語ることの必要性を感じるのである。トルコにとどまろう／行こうとしながら、今は「安全な場所」で話す私を。

謝辞 今回試論としてまとめた議論は、自身の「フィールドワーク」を通じた感覚の変化をもとにまとめたものである。「日本人」として「日本」で育った私が、具体的なイメージを描くことができなかつた「トルコ」に行き、「トルコ人」の友人やその他の国から来た友人とともに時間を過ごす中で、当初は「違和感」のなかつた言葉に対して違和感が強まった。自身の中で葛藤が現れ、「研究をすること」に疑問を持つ、こんなことの繰り返し3年であった。一方で私の価値観を壊し投げかけられる言葉や、感情の揺さぶりは私に「学ぶこと」の必要性と可能性を改めて感じさせた。今後も受け取った疑問や違和感を大切に、言葉にし続けることで感謝を示したい。最後に、まとまりきらない議論に耳を傾け、視野を広げるきっかけをくれる友人・ゼミの仲間・諸先生方、そして家族にお礼を。これはこういった人たちとの会話を通じて生まれたものである。

注

- 1) İŞİD (イスラーム国) とは、シャリーア (イスラーム法) による統治とカリフ制の再興を主張するとともに、反欧米を掲げて活動をする組織である。アル＝カイダ系など、イラク国内の組織が2006年に合流し、名称を変えながら活動を続け現在のイスラーム国となった。
- 2) 筆者は大学時代には「トルコ・ナショナリズム」の歴史を検討し、大学院入学後は都市部に人々が移り住み形成された「ゲジェコンドゥ」と呼ばれる「不法居住住宅地区」の住民運動の「研究」を通じてトルコと関わっている。
- 3) 1793年6月から1794年7月まで恐怖政治は続き、その後の

1798年に初めてアカデミー・フランセーズ辞典の補遺に「テロリズム」「テロリスト」という言葉が採録された。ここでは「テロリズム—恐怖による体制、システム」, 「テロリスト—革命手段の濫用によって生まれた恐怖体制の扇動者や支持者」と定義されている (ゲイロー・セナ2008: 16)。

- 4) 「われわれ」の中の矛盾は、なぜ「テロリスト」が生まれたかという歴史的・経済的・社会的文脈との関連性においても指摘できる。『言葉と爆弾』の著者ハニフ・クレイシは、ロンドンで育ったパキスタン人としての自らの経験から若者がイスラム原理主義へと向かっていく姿を描いている。その中で彼は「人種差別と原理主義がどちらも他者を抽象物に還元することで生を枯らすのであれば、文化が力を注ぐべきは他者を生かし続けることである」と述べている (クレイシ2015: 154)。
- 5) 現在の与党、公正発展党の初代党首。2003年からトルコ共和国首相を3期務め、2014年からは第12代大統領を務めている。
- 6) PKK (クルディスタン労働者党) とは、クルド人の分離・独立を主張する組織である。この前身はマルクス・レーニン主義のグループとして1973年に設立された「アンカラ民主・愛国主義教育協会」である。78年にPKKと改称され、この時に党首となったのがトルコ共和国においてクルド・ナショナリズム運動の中心となるアブドゥラ・オジャランである。FETÖ (フェトフラー主義者のテロ集団) は1960年代にフェトフラー・ギュレンを中心に始められた社会運動、ギュレン運動のトルコ政府による呼び名である。
- 7) 「国民の民主主義党」等、様々な翻訳があるが、ここでは今井 (2017) に従う。
- 8) 「ヨーロッパとアメリカ: 深い憂慮」ヒュリエット紙2016年11月5日付記事 “Avrupa ve ABD: Derinden rahatsız etti” <http://www.hurriyet.com.tr/avrupa-ve-abd-derinden-rahatsiz-etti-40268937> (最終閲覧日2017年1月30日)
- 9) なお、本論文ではトルコ政府の言説に従いこのPKK (クルディスタン労働者党) およびPKK系のTAK (クルディスタン自由の鷹), IS, FETÖ (フェトフラー主義者のテロ集団) による「テロ」事件を中心に議論を進めるが、これはそれぞれが「テロ組織」か否かを判断するものではない。
- 10) 冷戦の時代において、トルコはその地理的・政治的重要性が注目され「反共の前線基地」とされるとともに、1947年のトルーマン・ドクトリンとそれにもとづくマーシャル・プランの諸政策により莫大なアメリカの援助を受ける。しかしこの時期にアメリカの援助に頼りながら目指されていた外貨獲得と経済自由化はうまく機能せず、さらに紙幣増刷によってインフレが起こると、学生や知識人などが「反米・ケマリズム (建国の父と言われるケマル・アタテュルクの立てた6つの方針) の維持・世俗主義放棄反対 (この時に政権を握っていた民主党はモスクの建設を進めるなどの政策を進めた)」を掲げた反民主運

動を行う。これらを弾圧するために、政府は宗教政策を強化するなどの政策を進めた（新井2001, 今井2017）。

11) 「イスラーム」に関して「イスラム」と「イスラーム」の表記が混在する。原則は「イスラーム」としたが、これは文献名や引用の場合は原典に従い「イスラム」と表記した。

12) 宗教文献の出版の許可・礼拝の呼びかけのアザーンがトルコ語からアラビア語に戻されるなどの変更が行われた。また、同党は1954年の総選挙では「ヌルジュ」運動と言われるイスラーム宗教運動の協力を得て勝利したとされる（新井2001）。

13) これらの勢力はシャリーアを復活させ、イスラームの倫理に基づいた社会秩序を定着させることを目標とした。これは都市の一部知識人の支持を受け、さらには地方の商人・技術者を支持基盤として勢力を拡大させることとなる。1973年と77年の総選挙において、国民救済党は、共和人民党・公正党が単独で過半数を得られない中で、第三党の地位を獲得している（設楽1985：228-229）。

14) 具体的には、クルド系住民・政治犯への拷問・殺害など、無差別な作戦も多かったとされる。また1987年からは親PKKであるとみなした住民を強制移住させるという政策もとられていた（長場1998：44, 新井2008：98）。

15) この時期にテロ活動が活発化した背景には、クーデター以降、PKKが国外で戦闘要員を育成していたということがあった。戦闘員の訓練は、シリアの支配下にあるレバノンのベカー高原であった。ここにキャンプが設けられ、クルド地域の貧しい若者や欧州在住者などが訓練を受けた（新井2008：98）。

16) OHALと呼ばれるものであり、2016年7月15日のクーデター後には、テロ組織に関与する者をすべて排除するためとしてトルコ全土に出された。当初は3か月とされたものが、2016年10月3日、2017年1月3日に延長が決定され、現在も続いている。

17) 解決プロセスとは、2005年頃からエルドアンが提唱したPKKとの問題解決およびマイノリティとしてのクルド系住民の権利保証を目指す民族解放政策を具体化しようとするものである。2014年2月に合意がなされた後、オジャランは武装闘争放棄の条件として監査委員会の設置を提示したが、それに対してエルドアン大統領が反発をし、協議の余地がないことを明言したため、このプロセスが停滞した（岩坂 p. 99-100）。

18) 佐野彰洋「トルコ軍とクルド人反体制派組織の戦闘激化」日本経済新聞2016年2月4日付記事。

19) テロ実行犯に関しては、難民としてトルコに入国しテロを起こしている者がいると報道で言われると、現地の人の間でもそれを受け難民受け入れへの警戒（「トルコは受け入れすぎだ」といった発言）もみられた。ISの戦闘員に関しては、トルコ国内にもリクルート拠点等があるとされ、決して単に外部からの脅威というのではなく、国内にも経済的背景によって創られた「脅威」が存在している（今井2016, 新井2015b）。

20) 表1参照。ISによる最初のテロはスルチにおけるものであると述べるものもある。これらの点に関しては、情勢が現在進行形で起きており、今後詳しい分析がなされていくものと考えられるため詳細の名言を避ける。また、「テロ」行為の発展と都市化の関連性については、ゲイロー・セナでも触れられているように、「テロの舞台」として人口が集中し権力も集中している都市の持つ意味というものがあり、その背景に都市化があるという指摘もある。しかしながら、Sayarıに見られるような、移住の結果生み出されたイスタンブルやアンカラといったゲジエコンドゥ（「不法居住」住宅地区）がそういった人々にとっての「解放されたゾーン」であったという表現に関しては、留意が必要である。

21) パリでのテロに関しては、「哀悼の三色旗、パリ市民連帯、同時テロ2週間（日本経済新聞2015年11月28日付）」、ニュースのテロに関しても「邦人「平和な街が…」、南仏テロ一仏大使公邸で50人が黙とう、追悼集会（日本経済新聞2016年7月16日）」という報道がみられた。

22) 一方で、クーデターで衝撃を受けたのが、呼びかけに答えて通りに出た人々が軍人に対して「暴力」をふるっている姿が報道されたときである。クーデターが起きたとされ、エルドアンが携帯からの映像を通じてスピーチをした前後に「トルコ国民は通りに出て立ち向かうように」というメールが一般市民の携帯に届いた。それを受けて、外に出た人々が、戦車に乗って勝利を喜ぶ姿はクーデター後民主主義の勝利の象徴として使われた。「ヒーロー」として扱われる「クーデター」に立ち向かった人々もまた、「暴力」を利用していたのである。脅威においてある種の暴力が正当化される構造には、9.11後のアメリカのグアンタナモ収容所での出来事を思い出させるものがあった。「クーデター」への悪のレッテルの付与によって、そこで起きた「暴力」が承認され、不可視化されていたのである。

文献

アサド、タラル 2008. 『自爆テロ』青土社。

アパデュライ、アルジュン 2010. 『グローバリゼーションと暴力—マイノリティの恐怖』世界思想社。

新井春美2008. トルコにおけるPKK問題. 海外事情56(5) : 93-109.

新井春美2015a. 難しいかじ取りを迫られるトルコ— I S への対応, 国民の不満蓄積など, 内外の難題に直面—. インテリジェンス・レポート79 : 49-59.

新井春美2015b. トルコとIS—浮かび上がるトルコの課題—. 海外事情63(9) : 57-71.

新井春美2016. トルコにおけるクーデターと軍. 海外事情64(9) : 30-45.

新井政美2001. 『トルコ近現代史』みすず書房。

新井政美2002a. イスラム国家から国民国家へ—トルコにおける

- 国家の正統性をめぐって. 木村靖二ほか編『現代国家の正統性と危機』山川出版社: 182-198.
- 新井政美2002b. トルコ共和国一複数政党制の時代. 永田雄三編『新版 世界各国史 9 西アジア史 II』. 山川出版社: 391-410.
- 伊藤浩志2016. なぜ「不安」は消えないのか2—脳神経科学から見た不安. *みすず*649: 6-16.
- 今井宏平 2016. トルコにおいて伸長する「イスラーム国」—その起源と構成—. *アジア研ワールド・トレンド*250: 40-47.
- 今井宏平 2017. 『トルコ現代史—オスマン帝国の崩壊からエルドアン時代まで』中央公論社.
- 岩坂将充 2016. トルコにおける2015年総選挙とエルドアン体制の政策変容. *中東レビュー*3:96-109.
- 大島 史 2005. トルコ「80年体制」における民族主義とイスラーム—トルコ—イスラーム総合論を中心に—. *イスラーム世界*64: 1-20.
- クレイシ, ハニフ2015. 『言葉と爆弾』法政大学出版局.
- ゲイロー・J=F/セナD. 2008. 『テロリズム—歴史・類型・対策法』白水社.
- サイド, エドワード2003. 『イスラーム報道』みすず書房.
- 澤江史子2005. 『現代トルコの民主政治とイスラーム』ナカニシヤ出版.
- 設楽國廣1985. 現代のトルコ—イスラームと世俗主義の問題点—. 中村廣治郎編『講座イスラーム〈2〉イスラーム・転変の歴史』筑摩書房: 216-232.
- タウンゼント, チャールズ2003. 『テロリズム』岩波書店.
- 高木彰彦2005. 地政学と言説. 水内俊雄編『空間の政治地理』朝倉書店: 1-23.
- トゥアン, イーファー1991. 『恐怖の博物誌』工作舎.
- ナーフィーシー, アザール2017. 『テヘランでロリータを読む』白水社.
- 内藤正典2014. 「イスラーム国」問題の縮図としてのトルコ. *世界*863: 196-205.
- 中島弘二2014. 泥, 石, 身体—身体と物質性をめぐるポリテクス—. *空間・社会・地理思想*17: 19-32.
- 西加奈子2016. 『i アイ』ポプラ社.
- バトラー, ジュディス2007. 『生のあやうさ—哀悼と暴力の政治学』以文社.
- 長場 紘1995. イスラーム復興の今日的展開. 『1980年以降のトルコの政治・経済構造』中東調査会: 24-43.
- 林佳世子ほか編2013. 『トルコ新聞記事翻訳ハンドブック』東京外国語大学.
- 福田 充2007. イスラームはどう語られたか?: 国際テロ報道におけるイスラーム解説の談話分析. *メディア・コミュニケーション: 慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所紀要*57: 49-65.
- 松谷浩尚1987. 『現代トルコの政治と外交』勁草書房.
- 若松大樹2008. トルコ共和国におけるネヴルース祭の今日的実践—せめぎあう民族性表出の場として—. *日本中東学会年報*24-2: 29-59.
- Gregory, D. 2009. Terrorism. Gregory, D. *et al. The dictionary of human geography. 5th edition*: 747-749.
- Gregory, D and Pred A. eds. 2007. *Violent geographies*. Routledge.
- Sarayı Sabrı 2010. Political violence and terrorism in Turkey, 1976-80: A restrospective analysis”. *Terrorism and political violence* 22:198-215.
- Sadik Toprak 2009. The new face of terrorism in Turkey: actor unkown political murders. *Journal of Forensic Sciences* 54:1388-1392.
- 資料
- “ Avrupa ve ABD: Derinden rahatsız etti ”
<http://www.hurriyet.com.tr/avrupa-ve-abd-derinden-rahatsız-etti-40268937> (最終閲覧日2017年1月30日)
- 佐野彰洋「トルコ軍とクルド人反体制派組織の戦闘激化」*日本経済新聞*2016年2月4日付記事.

おがわ・きょうこ
博士後期課程ジェンダー学際研究専攻

Whose Fear Is This? Re-thinking Terrorism and the Various Fears I Encountered in Turkey

Kyoko Ogawa (Graduate Student, Ochanomizu University)